

大賞

(北海道札幌市)

角谷 千飛路

「決意の日」父さんへ

「父さん、恥ずかしいから参観日に来ないで！」

小学校最後の父親参観を拒んだときの、父さんの悲しそうな顔は、10年経った今でもぼくの脳裏に焼き付いています。

ぼくは塗装職人の父さんを恥ずかしいと思っていました。

ペンキだらけの服に、ガサガサの手、シンナーくさい車。そのすべてが大嫌いでした。

ぼくが風邪をひいても、母さんと二人で現場に出て、

朝早くから夜遅くまで、休みもなく働き続け、おまけに冬は出稼ぎで本州に行く。

ぼくは寂しくて、父さんと母さんの苦勞も知らず、自分勝手に反抗していました。

自分のいたらなさを親のせいにして、家出もしました。

あの日、「もう家には帰らねえー」と睨みつけたぼくに

「ちゃんと飯食ってるのか。風邪ひいてないか」と、父さんは笑顔でした。

殴られると思っていたぼくは拍子抜け。ごぶしのやり場に困りました。

父さんがすい臓がんで余命一ヶ月と告知された日も、ぼくは家に帰らず、遊び歩いていました。

父さん、ごめんなさい。

なぜ反抗していたのか、自分でも理由がわかりません。

父さん、会いたいです。話したいことがたくさんあります。

孝行したいときに親はなし、と言いますが身に沁みます。

高校の卒業式に、父さんからもらった三行の手紙は、ぼくの宝物です。

「卒業おめでとう。父さんはペンキ屋の仕事に誇りを持っている。

命を懸けている。千ヒロもそんな仕事に巡り合ってほしい。

職業に貴賤なしだよ」

父さん、ありがとう。

ぼくは薬剤師を目指して薬科大学に行きましたが、どうしても父さんの跡を継ぎたくて、大学をやめる決意をしました。

父さんが死んでからは、母さんの仕事も激減し、抜け殻のようになっています。

今日は父さんの命日です。

ぼくの決意が正しいかどうかはわかりませんが、明日から母さんと一緒に現場に出ます。

父さんの分まで、母さん孝行するつもりです。

父の志を受け継ぐ心 実直に